



伝ウラシマタ ロウ



marudo88

伝ウラシマタロウ

『むかしむかし、浦島は、助けた亀に連れられて、
竜宮城へ来てみれば、絵にもかけない美しさ

乙姫様のごちそうに、鯛やヒラメの舞い踊り、
ただ珍しく面白く、月日の経つのも夢のうち、

遊びに飽きて気がついて、おいとま乞いも、そこそこに、
帰る途中の楽しみは、土産にもらった玉手箱、

帰ってみれば、こはいかに、元いた家も村もなく、
路に行きあう人々は、顔も知らない者ばかり、

心細さに蓋取れば、開けて悔しき玉手箱、
中からぱっと白煙、
たちまち太郎はおじいさん、
たちまち太郎はおじいさん』

悪ガキたちに浜辺で亀がいじめられていた。そこを通りかかった浦島は、子供らを注意し亀を助けた。亀を助けた浦島は、お礼として亀の背に乗せられ、竜宮城へと案内された。

乙姫も、亀の恩人を、せいっぱい歓待した。やがて浦島も、酒や踊りやらで、すっかり気をよくした。いつまでいてもいいよなので、ハメを外し、やりたい放題し始める。

乙姫はやがて、それを苦々しく思い始めた。しかし家来の手前もあり、あまり感情を露わにも出来ない。浦島のわがままの数々を、メモにつけていた。

そうとも知らない浦島は、魚のねえちゃんのお尻は触るわ、ごちそうを持ってくる給仕の男の顔が悪いと罵るわ、男はいらん！綺麗どころを寄せとわめいた末、代わりにご馳走を持ってきた給仕女をブスと怒鳴りつけ…。

こうなったのにも理由があった。ときは江戸時代、弟はさっさと結婚し、この漁村名物(佃煮など)のお土産屋を営んでいる。兄である自分は、商売するでなし、漁業するでなし、もちろん侍にもなれない。

学問で身をおさめようと努力したが、途中で挫折。レポートを出すのに四苦八苦した挙句、せっかく親が出してくれた学費も無駄にし、いまは40手前、独身のフリーターであった。

弟は既に所帯もちで、子供もいた。

「兄さんは頭いいから、もっと勉強すればいい。俺はあほやから、商売しか無いねん」と、兄がひさしぶりに訪ねてきて、息子などあやしてくれたので、プー太郎でもいいんだ。頭のいい兄さんこそ、学問の夢を追って、うらやましいじゃないかと、励ますつもりだった。子供の頃は、親からまんじゅうを3個もらったら、必ず弟に2個くれた優しい兄さん。孔子、孟子の教えを語ってくれた、賢い兄さん。

そんな、怒った顔見たこともない兄さんが、

「バカにするなっ！」

と、顔を真っ赤にして怒り、飛び出して行ってしまった。

子供の頃、勉強ができるばかりに、あほなことする、例えば18歳以下なのにパチンコ三昧やっている級友や、成績はほとんど最下位なのに、彼女のいるクラスメートを尻目に、勉強ばかりしてきた。そのおかげで、さまざまな昔の偉人の格言なんかには詳しくなった。考え方も深くなった。しかし、……。

いままでやってなかったことを、遊び半分ですべてやってしまっただけなのだった。むしろ、スナックなんかで、ねえちゃん相手に口説きすぎて、やり過ぎて、お店のコフモチのお兄さんに「お客さん、いい加減にしてくださいよ。そこまでですよ」とか凄まじつつ、人生を学べば良かったものを、こんな、資源豊富で鷹揚な、竜宮城なるところへいきなり放り込まれ、お金はタダだわ、サービスは極上だわ、しかも上品だわ、それで、いままでの37年、我慢していた優等生の、化けの皮というほどでないにしても、何かが、一気に出てしまったのであろう。

あるとき浦島は、宴会の席上、接待がなっていないとして、給仕の者ども、それに接待の女数名、はては調理師も全員、自分の前に連れて来させ、畳の上に正座させ、

「こないだもゆうたやろ！このあほう！あほう！わしを誰やと思とんねん。乙姫の、あの、乙姫の客やどーっ！！」

と、ひとりずつ、思い切り頭をこぶき始めた。

じつをいうと、こないだ、とはいつのことか、また、何を怒っているのか、呼び出された者達の、だれもわかっていなかったのである。それは、浦島も同様だった。酔っ払いすぎて、何に対して怒っているのか、自分でもわからなかった。

ただ、自分をここまで増長させ、やりたい放題させている、ここ、竜宮こそがわるいのだと、うそぶいていた。

「へへんっ、へへへっ、こんなダサイとこ、いてられるか。わしはもう、帰るぞっ！」

まさか本当に帰るハメになるとは思いもしなかったが、その言葉をうけて、しごく丁寧に、それこそ腫れ物に触るがごとくに、浦島は見送られた。

そのときに乙姫から渡された、お土産の玉手箱。「けっして開けてはなりませんよ」と。

亀の背に乗り竜宮城を出て、竜宮門をくぐる。

竜宮門は、かんぬきが外れていた。これは半年前、酒飲んで暴れたときに、壊したものだ。また、門の前の両側にあった2匹の狛犬も、一匹は横倒しになっていた。これも、3ヶ月前、やはり酒飲んで暴れて壊したものだ。門にはそのとき、立小

便まで、さらにしゃがんで、脱糞までしてしまった。乙姫はそれを見てびっくりしていたが、笑ってゆるしてくれてたな。たわいのない、じつにたわいも、罪もない思い出といえだし、また、地上ではけっして出来ぬはずだったな、懐かしいな。

「はははっ、いい思い出だな」

浦島は亀の背中に乗って門を出て振り向き、自分の武勇伝に少しの恥ずかしさを覚えつつ、亀に言った。

「なあに、気にしないでいいですよ」

その、亀の表情や口調は、8ヶ月前にここに来たときとは微妙に違っていた。表面上の付き合いの人だ。怒らせないように、おべんちゃらだけ言うておこうバージョンに、変化していたのだ。

にわかチンピラと化していたものの、元はと言えば村随一の秀才、育ちも悪くないのである。少し良心が咎めて、乙姫からの評判を聞いてみた。たわいのないはずが好きで、愛すべき、いい子だと言っていたか？ と、亀に聞いてみた。

「はい、私も童心に帰って、楽しかったと乙姫様も申しておりました。愛すべき、いい子だったと」

「そやろ、そんなとこやろ」

38歳の腹の出た中年男が、20代と思しき乙姫から、そんなに「いい子だった」と言ってもらいたいのか滑稽ではあったが、ともかく、内心、やり過ぎて愛想つかされてたかと思もしたことが、取り越し苦労だとわかってホッとしたのであった。

「地上に帰り、何かございましたら、開けてはいけませんが、その玉手箱があると、くれぐれも浦島さんに伝えてほしい、とのことでした」

と亀はいう。

「ん、ほうか」

もう、こんなものの言い方を、地上に着いたら出来なくなるのかと思ったら寂しい。またお手本人間的な、物言いをせねばならなくなるのか、等々考えているうちに、早くも波打ち際へと着いた。

「それじゃあ、あっしはこのへんで」

急ぐようにして亀は、きびずをざぶんと返し、あっという間に海中へ。

さてそのあとは、お話通り、村には知った人など誰もおらず、2日、3日と海岸で野宿し、また、バナナの木によじ登りまた、ヤシの木にもよじ登って、辛うじて飢えをしのぎつつ、この砂浜近くを通りかかる人々に聞いたところでは、どうやら何十年、いや、何百年も経っているらしい。

そのわりにはこの貧しい漁村は、ほとんど景色も変わらないのだが、たしかに見知った人もおらず、親も、あの弟一家さえもう、この世にいない模様である。

愕然として、頭がこんがらかるうち、ふと「何かございましたら、開けてはいけませんが、その玉手箱があると、くれぐれも浦島さんに伝えてほしい、とのことでした」との、先日の別れぎわの、亀の言葉を思い出した。

開けるとたちまち、乙姫の書いたと思われる、浦島の狼藉ぶりを書いたメモが、玉手箱から溢れ出してきた。

その、小さい字でいっぱい書かれたメモ書きを読んでいるうち、乙姫は、浦島のがまをいっさい許さず、8ヶ月間のうちの何ヶ月め、何日め、どんな行状であったということまで書かれているのを知るに及んだ。さらに、竜宮門脱糞事件については、五百年の伝統の竜宮門始まって以来の恥辱であること等、その檄文を読むうち、にわかには浦島の額から冷や汗が吹き出し、それはやがて高熱を帯びて雫となってメモの上にしたたり落ち、それは白煙となってあたり一面を覆った。そうしてメモ書きはすべて、燃えてしまった。

「開けて悔しき玉手箱、中からぱっと白煙、たちまち太郎はおじいさん」

歌の文句そのままに、たちまち、口もきけないほどよぼよぼの老人となった浦島は、しばらく生きて、そして死んだという。誰も、浦島が世界初の時間旅行した、すごい人物だと知らぬまま。

伝ウラシマタロウ

<http://p.booklog.jp/book/109037>

著者 : marudo88

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109037>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109037>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ